第 46 回大阪の医療と福祉を考える公開討論会

「ＡＣＰ（人生会議）を知っていますか？」をテーマに開催

第 46 回「大阪の医療と福祉を考える公開討論会」を令和７年 11 月 23 日午後、大阪府医師会館で開催し、約３００人の府民にご参加いただきました。今回は、「ＡＣＰ（人生会議）を知っていますか？――より良い最期を迎えるために、患者と家族、医療者みんなで考える」をテーマに実施しました。

司会は、山崎香佳・ＭＢＳアナウンサーが務めました。冒頭、加納康至会長が、「多死社会を迎えた現代において、患者が自身の希望に沿った最期を迎えるためにＡＣＰは重要ですが、一般の認知度は十分ではないように思う。本討論会でＡＣＰへの理解を深めてほしい」とあいさつしました。

その後、３人のパネリストより見解が示され、事前に寄せられた質問に回答しました。最後に、コメンテーターを務めた大平真司理事が討論を総括し、終了しました。

第２部では、映画試写会として「栄光のバックホーム」を上映。実話に基づく感動的なストーリーに多くの参加者が涙しました。

◆あなたが大切にしたいこと、伝えてますか？

――池永昌之・淀川キリスト教病院緩和医療内科主任部長

池永氏は、「心筋梗塞や脳卒中、交通事故などによって、急に意識がない状態になってしまう。そのような状況で、治療を自身で決められない時のことを考えたことはありますか」と参加者に問いかけました。その上で、自院での事例を挙げつつＡＣＰの重要性を強調し、自身の希望を周囲に伝えておかなければ、家族が困ることになるため、家族が集う機会に皆で考えてほしいと語りました。

◆家で生ききるという選択――川邉正和・かわべクリニック院長

川邉氏は、平成 27 年に在宅療養支援診療所を開設以来、約 750 人の患者を在宅で看取ってきたと回顧。入院医療と在宅医療の違いを示し、「夕食の匂い」や「家族の声」など、日常生活の中に医療や介護の専門職がチームで寄り添っていくのが在宅医療だと力説した。一方で、入院医療と在宅医療のどちらが正しいではなく、「どう生きたいか」が重要であり、病気になる前から家族で話すことが ACP だと訴えました。

◆「よくいき」という考え方――佐々木慈瞳氏（公認心理師／僧侶）

佐々木氏は、「よくいき」を提唱。「よくいき」とは、▽欲ばりで粋な自分▽善く生きること――であり、カッコいい自分・あこがれる自分になるために努力することだと説明しました。そして、自身の「よくいき」を周囲の人に伝え、理解してもらうことが大切だと述べ、自分らしい生き方が周囲に重なり、「良く逝ききる」ことができると説きました。